（様式）

令和３(2021)年度　いちご新品種実証展示ほ　成果情報

基肥量の違いが「とちあいか」が生育、障害果発生に及ぼす影響

要約

いちご新品種「とちあいか」の基肥量を減らした結果、頂花房の障害果の発生は低くなった。一方、一次腋花房の障害果は多いときで 52%発生し、栽培期間を通した障害果の発生割合は、両区とも 14%であった。

○ 展示のねらい

いちご新品種「とちあいか」の基肥量の違いによる生育、障害果の発生程度を比較し、現地適応性を実証する。

１）試験区概要

供試区：基肥量　８kg/10a、対照区：基肥量　12kg/10a

２）栽培（飼養）概要

(1) ハウス構造　南北連棟ハウス

(2) 定植　９月 11 日　株間：25cm、畝間：112.5cm

○ 主な成果

いちご新品種「とちあいか」の基肥を減らした結果、頂花房における障害果は 14%発生し（対照区 26%）、その多くは先白果であった。一次腋花房から二次腋花房では、障害果は 52%発生し、先白果の割合が 36%であった。栽培期間を通した障害果の発生割合は、14%と基肥量による差が無く、基肥を減らした栽培では一次及び二次腋花房における障害果の発生低減が課題と考えられた。

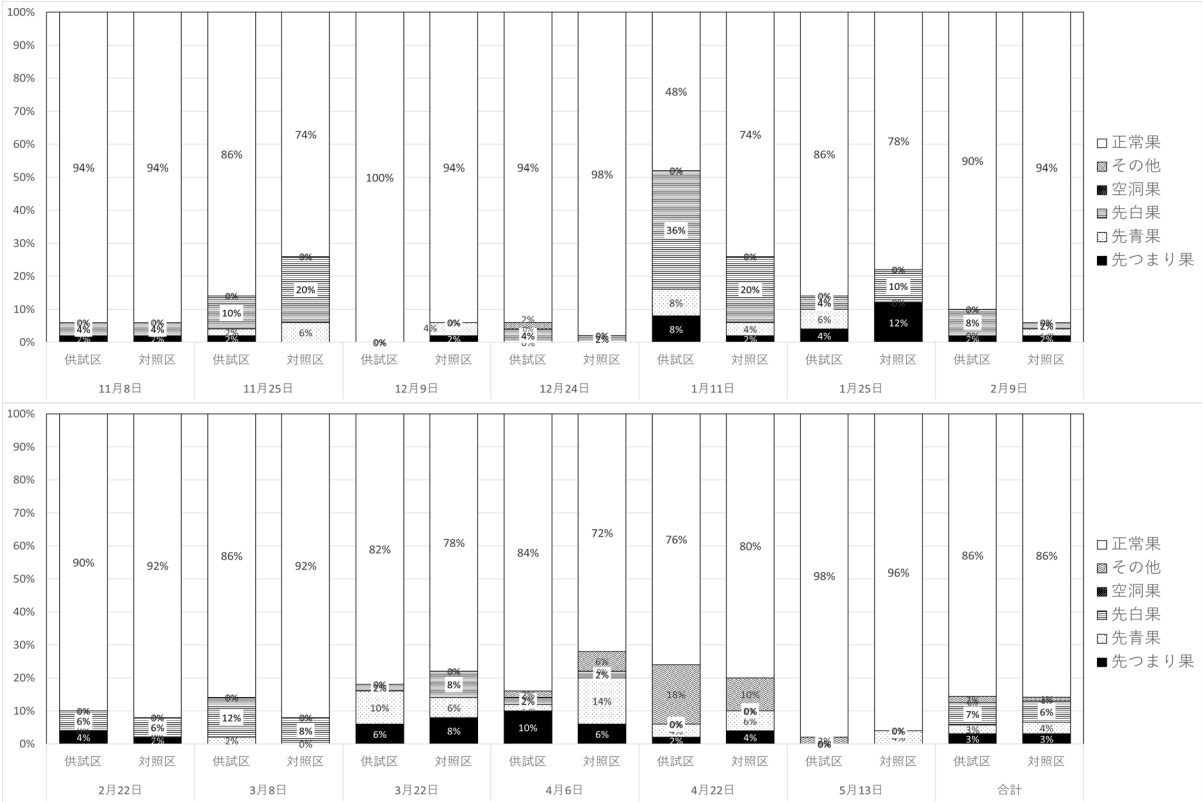

図１　障害果の発生割合

○ 今後の方向性

頂花房の障害果の発生は基肥量を控えることで少なくなったが、一次腋花房以降の障害果については、その後の生育と関係するため、栽培期間を通した判断が必要である。

実施機関 ： 安足農業振興事務所経営普及部　　実施場所 ： 佐野市

問合せ先 ： 栃木県農政部経営技術課技術指導班　TEL 028-623-2322　FAX 028-623-2315